

# 実践的コミュニケーション能力の育成と評価

—インタビューレッスンの実践を通して—

萩原 恵美 ・ 深澤 清治\* ・ 川原 垂弥\*\* ・ 坂元 真理子\*\*\*

## Development and Evaluation of Practical Communication Abilities

—Through the Practice of Interview Lessons—

Emi HAGIHARA, Seiji FUKAZAWA, Ami KAWAHARA, and Mariko SAKAMOTO

**Abstract.** This study is related to development of students' practical communicative abilities. It is essential for the students to have an opportunity to learn communication strategy. In our study, the students had Interview Lessons with ALT and learned communication strategy in order to enhance their communication abilities. We also studied the evaluation of practical communication abilities. We divided the communication abilities into four aspects: "Interest, Motivation and Attitude for Communication", "Ability of Production", "Ability of Reception", and "Knowledge about the Language and the Culture". As a result, this study suggested that the Interview Lessons are very useful in developing students' practical communication abilities, which is related to communication strategy.

**Key words:** practical communication abilities, communication strategy, Interview Lessons

### I. はじめに

本校では、研究主題として「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造」を掲げ、研究と実践を続けてきた。英語科においては、「明日を担う生徒を育てる」とは、「国際化が進む社会の中で起こるいろいろな変化に戸惑うことなく、柔軟に対処することのできる生徒を育てる」ことと考えている。また、「生きる力」を国際社会の中で相手のことを理解し、自分の意志を的確に相手に伝える力、すなわち、「実践的コミュニケーション能力」であると捉えている。

また、本校の教育目標である3つの力と英語科の関わりについては、特に「多元的価値観を受容する力」と「表現・コミュニケーション力」に強い関わりがあると思われる。そもそも外国語を学ぶことは、日本以外の国や地域における文化や考え方を学ぶことにつながり、それは「多元的価値観を受容する力」となる。また、英語を手段として、自分の思いや考えを他人に伝えることも英語科の中心的な目標であり、「表現・コミュニケーション力」を育てることは、つまり「実践的コミュニケーション能力」の育成であると考えられる。

---

\*広島大学大学院教育学研究科助教授

\*\*広島県教育委員会派遣研究員

\*\*\*広島大学大学院教育学研究科博士課程後期文化教育開発専攻

今年度より実施された学習指導要領では、外国語科において特にこの「実践的コミュニケーション能力」に重点が置かれており、外国語の基本的な知識をつけるのみでなく、自分の思いを相手に伝えたり、相手のことを理解したりするコミュニケーションの力をつけることをねらいとしている。また、そのようなコミュニケーション活動においてCommunication Strategyの重要性が注目されている。

本校英語科では、昨年度、ALTとのインタビューテストの検証を通して、生徒の実践的コミュニケーション能力に関する評価をするとともに、今後の指導のあり方について考察を行った。その結果、生徒のコミュニケーション能力について様々な課題が浮き彫りになった。そこで、その課題を受けて、本年度は以下に述べるように、研究をすすめていった。

## Ⅱ. 研究意図

昨年度のALTとのインタビューテストの検証を通して、次のような課題が明確になった。

- ・わからないときの聞き返し等の表現を知っていても、実際に使用することができた生徒が少ない。
- ・“How are you?” “Fine, thank you. And you?”などの授業で毎時間練習する表現であっても、インタビューテストの中で、とっさに使用できない生徒が半数近くいる。
- ・その他のあいさつ表現が全く使えず、全体としてALTとの会話が成立しない生徒がいる。

以上のことから、実際に英語を使用する経験を積むことが実践的コミュニケーション能力をつけるために重要であると認識できた。そのためには、教室での授業で、コミュニケーションの手段としての英語を生徒同士が使う場面を増やすことと合わせて、ALTと生徒が個人として触れあい、英語を使ってコミュニケーションをとる場を設定することが有効であると考えた。

そこで、本研究では、インタビューレッスンと称してALTとのコミュニケーションの場を設定し、その実践の効果と課題について考察する中で、今後の実践的コミュニケーション能力の育成を目指した指導のあり方について探っていきたい。また、学習指導要領の改訂に伴い、大きく変化を遂げた評価については、本校英語科としての評価規準と評価方法について述べ、その中でのインタビューレッスンの役割と、一年間の取り組みの成果と課題について考察していく。

## Ⅲ. 本校英語科の評価規準と評価方法

新学習指導要領においては、外国語科の教科目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」となっている。また、その目標に対する評価の観点として、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「表現の能力」、「理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」の4つがあげられている。本校英語科では、まず、国立教育政策研究所によるそれぞれの観点別の評価規準の熟読から始まり、その評価の規準の意味することを分析し、本校英語科として、以下のような評価規準を作成した。

## 1 本校英語科の観点別評価規準

### (1)コミュニケーションへの関心・意欲・態度

#### ①言語活動に積極的、意欲的に取り組んでいるか。

グループ・ペアなどで協力して学習しているか、ノート、プリント等を読みやすい字できちんと書いているか、得意・不得意にかかわらず努力をしようとしているか

#### ②さまざまな工夫をすることで、コミュニケーションを続けようとしているか。

わからないときに、聞き返したりしているか

沈黙せず、会話を成り立たせようとしているか（あいさつ等も含む）

どう表現したらいいかわからないときに、ジェスチャーや知っている単語・表現を使用して努力してコミュニケーションを継続させようとしているか

### (2)表現の能力

表現の能力とは、基本的にoutputの能力ととらえる。内容としては、初歩的な英語を用いて、自分の考えや気持ちなどを正しく、適切に話す／音読する／書くことができるか。

### (3)理解の能力

理解の能力とは、基本的にinputの能力ととらえる。つまり、初歩的な英語の情報を正しく聞き取る／読みとることができるか。初歩的な英語を、初歩的な英語の情報を正しく聞き取る／読みとることができるか。（outputと異なり、正しくinputできたかどうか判断するのは、難しい。「聞く」能力を測るには、listening testの内容も工夫し、純粹に聞き取れたかどうか測れるテストにする必要がある。また、「読む」能力についても、テストにおいて既習の教科書の文以外の長文を出題することで、「読む」能力を測る必要があると考える。）

### (4)言語や文化についての知識・理解

「言語についての知識・理解」は、「英語に関する基本的な知識」ととらえる。英語に関する単語、発音、語句、表現の基本的な知識がついているか。「文化についての知識・理解」は教科書・授業等で紹介された世界の各国・地域の文化についての知識・理解である。世界の各国・地域の文化について正しい知識をもち、理解しているか。

## 2 本校英語科の評価の具体的データ

### コミュニケーションへの関心・意欲・態度

…Speech Test, Interview Test, 提出物, 授業態度など

### 表現の能力

…Speech Test, Reading Test, Interview Test, 定期テスト（表現の問題）など

### 理解の能力

…Listening Test, Speech Test, Interview Test, 定期テスト（教科書で既習の長文以外の読解問題）など

### 言語や文化についての知識・理解

…単元ごとの小テスト, 定期テストなど

## IV. Communication Strategyの育成と評価

### 1 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」とCommunication Strategy

評価の4観点のうちの一つである「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」には、前述したように、「さまざまな工夫をすることで、コミュニケーションを続けようとしている」かどうかを評価するものがあげられている。これは、Communication Strategyと呼ばれるものであり、実践的コミュニケーション能力の育成にあたって、近年注目されている力の一つである。Communication Strategyとは、ビービ(1998)によると、「目標言語を完全に習得していない第二言語や外国語の学習者が、限られた能力のなかで、できるだけ意思伝達を図ろうとする方法。例えば、パラフレーズや、身振りなどの使用によって、目標言語では言い表せない事柄を表現したりするもの。」である。本校における昨年の研究の中で、生徒達にそのCommunication Strategyに関する課題が見られたことから、本年はそれを育成するための取り組みを行った。それが、インタビューレッスンである。

### 2 インタビューレッスン

#### (1) インタビューレッスンの目標

インタビューレッスンの目標は以下のとおりである。

- ①ALTとの個人、あるいは小集団でのコミュニケーションの場を設定することにより、一人一人が英語を使う必要性を感じることができるようにする。
- ②教室での授業で学習した英語表現をインタビューレッスンで使うことにより、定着を目指す。
- ③ALTと英語で会話をする中で必要となってくるCommunication Strategyを学習させる。
- ④ALTとの会話を通じて、お互いを知る機会とし、英語がコミュニケーションの道具であるということを生徒に認識させる。

#### (2) インタビューレッスンの概要

本校には、各クラス年12回ALTが派遣される。昨年までは、教室でTeam Teachingによる授業をしていたが、本年、3年生においては、この12回を全てインタビューレッスンに充てた。

インタビューレッスンでは、別室(英語準備室)にて、グループ(教室の生活班 1グループ4~5人で8グループ)ごとにレッスンを行う。1時間の授業が50分であるので、1グループ出入りを含めて5分程度になる。

待ち時間は教室で別課題を行い、JTEがその指導を担当する。インタビューレッスンはビデオに録り、JTEはそれを見た後、生徒に事後指導を行う。

#### (3) インタビューレッスンでの生徒の具体的目標

インタビューレッスンでは、特にCommunication Strategyに主眼をおいた目標を定め、生徒に伝え、各レッスン後に自己評価をさせた。(図1参照)

(インタビューレッスンの共通目標)

- ①入室から退室まで、一連の会話として成立させるようにする。(出入りの際のマナー、あいさつなどを含む)
- ②聞くときは、アイコンタクトを意識し、相手が聞いてもらっているとわかるように、あいづち等

の反応をするようにする。

- ③聞き取れなかったときは、“Pardon?”などの表現を用いたり、理解できなかった言葉を繰り返したりして、自分がわからないということを伝えようとする。
- ④話すときも、アイコンタクトを意識する。棒読みではなく、会話として成り立つよう、自分の気持ちをこめて話す。
- ⑤つまったり、何と言っていいかわからないときも、知っている単語やジェスチャーを駆使して、何とかわかってもらうよう努力する。

その他の目標は、各インタビューレッスンの内容によって設定し、生徒に伝える。

Mr. Weberとの

# Interview Lesson

を振り返って  
Date( October 11th )

CLASS(    )NO.(    )NAME(    )

**【聞くとき】**

①自分に話されているとき、Mr. Weberの方を見た。  Yes    No

②同じグループの人が話しているとき、その人やMr. Weberの方を見た。  Yes    No

③何か反応した。(うなずき、あいづち、驚きの言葉、など)  Yes    No

**【話すとき】**

①Mr. Weberの方を見て話した。  Yes    No

②つまったり、よくわからなくなってもなんとか英語で話そうと努力した。(自分で、人に助けを求めた場合は、No。わかる単語やジェスチャーを使うのはYes)  Yes    No

③棒読みではなく、内容が伝わるように話そうと努力した。  Yes    No

**【その他】**

①あいさつをした。  Yes    No  
(Yesの人はどんなあいさつをしたか。例: Hi. Good morning. How are you?  
Thank you. Bye.)

Hello. How are you. Thank you.  
See you.

Mr. Weberの意見はどんな意見だったですか。

危険で、とてもよくない。

自分はその意見に賛成・ 反対

**自分の意見** I think playing games is exciting and refreshing.  
But I don't want children to feel exciting when they play really fighting games.

図1 インタビューレッスンの自己評価例

## (4) 各インタビューレッスンの取り組みと生徒の変容

## ①第Ⅰ期（4月～7月）

第1回	4/19 (金)	自己紹介+1 question
第2回	5/10 (金)	ゴールデンウィークについて+1 question
第3回	5/24 (金)	習ったばかりのHave you ever ~?を使って
第4回	6/7 (金)	インタビューテスト i (グループ)
第5回	6/21 (金)	日本の風物紹介 (インタビューテスト ii)
第6回	7/12 (金)	夏休みについて+他の生徒による1 question

夏休みまでの第Ⅰ期は、自分のことについて話したり、聞かれて答えて終わるのではなく、会話を発展させることの基本について学習した。通常の授業でも、授業の最初のWarming-upにおいて、ペアでQ&Aのあと、“Oh, did you?”などの反応を返す練習、感想をたずねる表現“How was it?”とその答えのバリエーションの練習などを行った。インタビューテスト i はグループで行い、それぞれがALTから質問を受けて答え、他の生徒がそれに関連してたずねた質問に対して答えるテストである。

前述のインタビューレッスンの共通目標のうち、①については、第2、第3回のレッスンの頃には自然にできるようになってきた。②、④に関しては、少しぎこちなさが見られるものの、そうしようとする努力が見られた。③、⑤は、グループによるレッスンということもあり、ついグループの他のメンバーが日本語で手助けしてしまい、その機会を逸してしまったという場面があった。

## ②第Ⅱ期（9月～1月）

第7回	9/20 (金)	英語がわからない身近な単語をどうやって伝えるか (インタビューテスト iii)
第8回	10/11 (金)	Discussion (暴力的なゲームと子供について)
第9回	10/18 (金)	In the hospital (体の不調を訴える) (インタビューテスト iv)
第10回	11/15 (金)	インタビューテスト v (個人・前半)
第11回	11/29 (金)	インタビューテスト v (個人・後半)
第12回	1/17 (金)	最後のインタビューレッスン (ALTとのお別れ会)

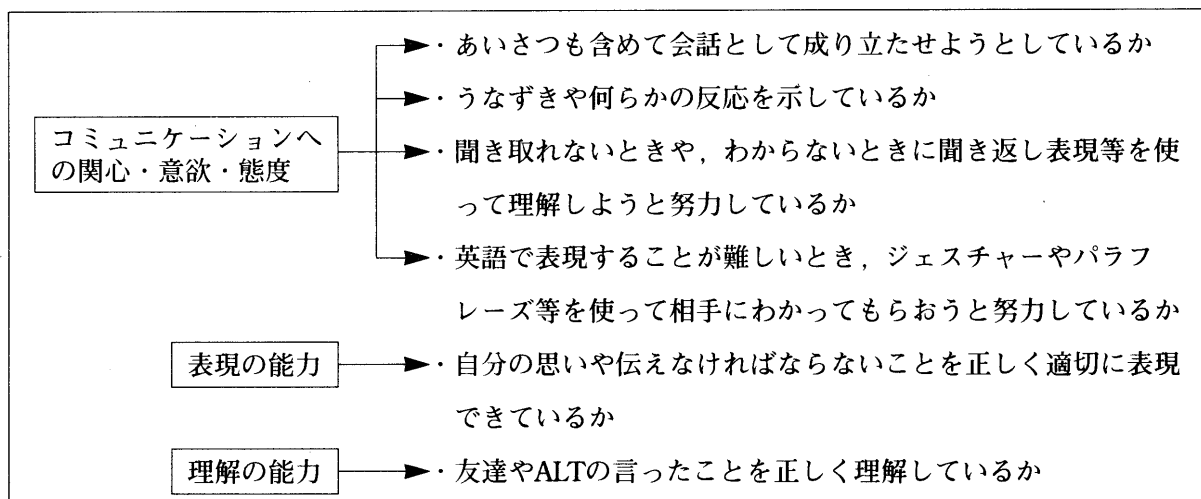
後半の第Ⅱ期では、教科書の内容とタイアップさせ、より自分の思いや考えを英語で伝える場面を設定した。通常の授業内でも、Communicative Activityとしてpair work, group workで実践的な活動を行うが、ALTに対してやってみることで、通じるかどうかわかったり、実際にCommunication Strategyを要求される場面を与えたりすることができた。

インタビューレッスンの共通目標のうち、①については、すでに当たり前のようになっているが、さらに、その簡単なあいさつの中で、生徒一人一人が自分らしさを出すように工夫していた。教育実習生に英語のあいさつのジョークをおしえてもらったときも、生徒から「今度インタビューレッスンで言ってみよう！」という声があがり、実際に何人もそのジョークを使ってALTを驚かせた。②、④についてもかなりできるようになってきた。③、⑤に関しては、内容が難しくなってきたこともあり、窮地に立たされることも少なくなかった。しかし、第Ⅱ期では、個人でのインタビュ

ーテストが多かったため、周りの人に日本語での説明を求めるのではなく、何とか自分でその場を乗りきらなければならず、“Pardon?”などの聞き返し表現や、相手の言ったことを繰り返すことで、相手に自分が何がわかっていないか明確に伝えられること、ジェスチャーやパラフレーズなどのCommunication Strategyを学ぶ機会が多かったと思われる。

### 3 インタビューテストによる評価

授業やインタビューレッスンで学習したことを基に、インタビューテストを5回実施した。インタビューテストでは、その内容によって次のように3観点に振り分けて評価を行った。



(インタビューテストとその評価の具体例)

インタビューテストiv In the hospital (体の不調を訴える)

#### (1)テストの到達目標

自分の症状をALTに伝え、ALTから言われる病名と処置を聞き取り、理解する。

#### (2)テストの内容

テスト会場は、病院と設定されている。入口にあるメモを取り、それで自分の症状が確定する。その症状を医者役のALTに英語で伝える。ALTから、病名を言われたらそれをメモし、さらに処置を言われたら、その処置を書き記したメモを取る。テストが終わったら、JTEに病名と処置のメモを渡す。ALTは生徒から聞いた症状と自分が言い渡した病名及び処置をカルテにメモする。JTEはテスト後、生徒からもらったメモとALTが書いたカルテを照合する。

#### (3)評価の基準

##### ①コミュニケーションへの関心・意欲・態度

あいさつをきちんとしたか、聞き取れなかったり、わからなかったりしたときに聞き返し表現等を使ってわかろうと努力していたか、英語で表現することが難しいとき、ジェスチャーやパラフレーズ等を使って相手にわかってもらおうと努力しているかについてABCで評価。

A…非常によく努力をし、会話を成立させようとしていた。

B…よく努力をし、会話を成立させようとしていたが、聞き返しやパラフレーズ等で3回以上不十分な点が認められた。

C…聞き返しや、パラフレーズ等が十分でなく、会話の成立が難しい点が目立った。

## ②表現の能力

自分の症状を正確にALTに伝えたか。(生徒の症状メモとALTのカルテの一致で判断)

A…2つの症状ともに正確に伝わった。

B…1つの症状だけが正確に伝わった。

C…2つとも正確に伝わらなかった。

## ③理解の能力

ALTの言った病名と処置を正しく理解することができたか。(生徒の病名及び処置のメモとALTのカルテの一致で判断)

A…病名も処置も全て正確に理解することができた。

B…病名か処置かどちらかのみ正確に理解することができた。

C…病名も処置も正確に理解できなかった。

## (4)テストの結果

今年初めて、個人によるインタビューテストであった。そのため、聞き返し表現やパラフレーズ等のCommunication Strategyが必要とされる場面に生徒一人一人が晒されることになり、多くの生徒がよく努力していた。また、難しい症状もおよそ8割の生徒が正確に伝えることができた。病名や処置の聞き取りでは、ALTの英語が速く、聞き返し表現が必要となったが、最後には理解できた生徒がほとんどであり、全体として成果が認められたテストであった。

## 4 インタビューレッスンの成果と課題

昨年度課題であったCommunication Strategyの育成を目指して、本年度インタビューレッスンを導入した。その結果、成果として主に次の3点があげられる。第1に、ALTと会話を成り立たせようとする姿勢は生徒の中に育ってきたことである。昨年度、困難を感じられたあいさつ表現についても、最も早い時期に自然にできるようになった生徒が多く、そのときの課題となっているコミュニケーション活動だけではなく、レッスン全体を会話として成立させようとするようになった。第2に、授業で学習した表現をインタビューレッスンで使ってみるといことが、学習の動機付けになったことである。一斉授業のTeam Teachingでは、なかなか一人一人には与えられない機会もインタビューレッスンでは得ることができ、通じたことで喜びを感じたり、自分がその言葉を理解できたことを確認したりすることができた。第3に、ALTと生徒達がお互いのことを一人の人間として理解できるようになり、インタビューレッスンがコミュニケーションの場になっていったことである。英語で様々な話をする中で、お互いが好きなことや、日々の生活の様子などを知り合うことができ、その結果、さらに新しく学習した表現を使ってALTと話をしたいと思うようになっていった。

しかし、50分授業の中で、しかも年12回という回数の中では、個人レッスンの機会を与えることが難しく、グループでのレッスンがほとんどであったことで、いくつか課題が残った。まず1つは、聞き取れなかったり、自分の思いを表現することに困難を覚えたりしたときに、ついグループの他のメンバー



が日本語で助けてしまうことである。できるだけそうしないよう指導はしたが、ALTの英語が難しい場合、そうせざるを得ないと判断したこともあったようである。反面、グループでのレッスンであったからこそ、安心して参加できた生徒もいる。また、Communication Strategyは、会話を成立させるのが困難な状況下で育てることができるが、コミュニケーションへの意欲そのものを失いかねないことも今後の課題である。そのためには、インタビューレッスンの内容に工夫をし、生徒があらかじめ学習したことを発揮できる状況を作り上げながら、より具体的なCommunication Strategyを十分指導する必要がある。

## V. おわりに

本年度、インタビューレッスンの実践を通して、生徒にCommunication Strategyを習得する機会を与えることができた。インタビューレッスンで、ALTとコミュニケーションをするためには、基礎的基本的な英語に関する知識が必要であることも再確認できた。また、natural speedで話すALTの英語を理解するためには、聞く力の育成が重要であると考えられる。

本年度は、3年生のみインタビューレッスンを年間にわたって指導に組み入れてきたが、1、2年生についても、少しずつ導入しつつある。来年度は、本年度の成果を生かしながら、全ての学年において、年間を通しての指導計画にインタビューレッスンを位置づけていきたい。また、基礎的基本的な英語に関する知識の定着や聞く力の育成に力を入れていきたい。

さらに、本校の目指す3つの力のうちの一つである「表現・コミュニケーション力」を育てる上でも、このCommunication Strategyが重要になってくると思われ、英語科における「実践的コミュニケーション能力の育成」と本校の目指す3つの力の育成とが密接な関わりを持ってくると考えられる。英語でも日本語でも、他者を認め、自己を表現しながら、国際社会の一員として自分を確立していく生徒を育てていくことを目標にしていきたい。

## 引用・参考文献

- ビービ, L, M. 卯城祐司・佐久間康之 (訳). 第二言語習得の研究 ―5つの視点から. 大修館. 1998.
- 胡子美由紀. 「主体的な学習意欲を育む英語科授業 ―社会科との連携を通して―」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」. 第32集. 2000. pp.89~103.
- 萩原恵美・胡子美由紀. 「実践的コミュニケーション能力を育てる指導」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」. 第34集. 2002. pp. 95~105.
- 平田和人. 新中学校教育課程講座 外国語. ぎょうせい. 1999.
- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター. 「評価規準の作成, 評価方法の工夫改善のための参考資料 (中学校)」. 2002
- 黒瀬基郎ほか. 「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造(2)」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」. 第34集. 2002. pp. 1~8
- 文部省. 中学校学習指導要領. 解説 ―外国語編―. 東京書籍. 1999.
- オックスフォード, R.L. 穴戸通庸・伴紀子 (訳). 言語学習ストラテジー. 凡人社. 2000.